



TITLE:

静脩 Vol. 19 No. 1 (1982.4) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 19 No. 1 (1982.4) [全文]. 静脩 1982, 19(1)

ISSUE DATE:

1982-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65974>

RIGHT:



静脩

1982年4月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 19, No. 1

ご 挨拶

高 村 仁 一

このたび、はからずも附属図書館長に選出され4月1日に就任いたしました。前館長の林 良平先生は、館長として9年間にわたり、本学附属図書館の画期的な発展と充実に尽くされるとともにわが国の大学図書館行政に多大の貢献をなされました。その後を引き継ぐ責任の重さを痛感するものでありますが、輝やかしい伝統を誇る本学の学術研究に対して、附属図書館の果たすべき支援機能を一層高めよう、図書館職員とともに、微力ながら努力いたす所存でありますので、前館長同様、よろしくご鞭撻ご教示を賜われますようお願いいたします。

ご承知のように、総長はじめ関係各位のご尽力により、附属図書館の新館が文部省によって認められ、ただいま工事が進行中であります。新館図書館の基本構想および建築計画の概要についてはさきの『静脩』号外（1981年6月、1982年1月）に示されているように、従来の学習図書館、総合図書館としての機能をさらに充実し、新しい時代に適応した図書館づくりを目指したものであります。これを本学のメイン ライブラリーとして立派に整備することが、当面の大きな仕事であります。同時に、何よりも大切なことは、この図書館が、本学の教育、研究に対する支援機構として

いかに利用者各位の多面的要請にこたえていくか、運営の具体化こそ最大の課題であろうかと考えております。

本学の図書館は、附属図書館（中央図書館）と55の部局図書館（室）から成り、全学の蔵書数は400万冊を超える全国屈指の図書館システムであり、最近では年々10万冊の増加をみるに至っております。各部局の図書館（室）は、その部局の特質に応じた自主的な運営を確保しつつ、附属図書館を中心とした全学的な協力体制を形成しているのが実際の姿であります。このような図書館システムのもとで、新しい図書館としては、まず、全学の学生を対象とした学習図書館としての勉学の環境づくりが大切であることは申すまでもありませんが、これまで以上に整備を必要とするものの一つは附属図書館新館の基本方針（『静脩』号外

1981年6月）にもありますように、近年における学術情報量の飛躍的増大に伴ない、全学的な視野に立って、研究図書館としての機能の充実をはかることであると考えております。このことに関して附属図書館が、各部局図書館（室）の独自性を尊重しつつ、全学的な有機的連繋の一層の緊密化に向けて連絡、調整をはかり、かつ、資源共有の理念に留意しつつ、地域および全国的規模の学

術情報システムにおける役割をも念頭において、図書館活動の活発化を促すことによって、本学の学術研究の進展に対して貢献しうることを念願しております。さらに、図書館資料の著しい増加に伴って各部局の要望に応じて保存図書館としての役割を果たすことも、新図書館に期待されているのが現状であります。

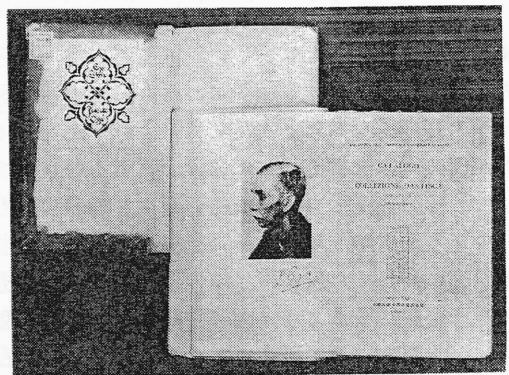
しかし、これらのことを具体的に、どのように実現していくか。道は決して容易なことではあり

ません。図書館システムの活動は、全学の教育・研究に深くかかわり合いをもち、各学問分野と相互に連繋し合うものでありますだけに、全学的な意志の反映のもとに、鮮明な図書館像の実現を目指して努力を重ねたいと思います。ここに重ねて図書館の整備充実、運営ならびに日常活動に対する各位の深いご理解とご協力、ご支援を心からお願いするものであります。

詩聖ダンテに魅せられた明治人の コレクション：旭江文庫

文学部図書室 村 橋 ル チ ア

イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265-1321) の著作は各国語に翻訳されているが特に代表作“La Divina Commedia”(神曲)、“La Vita Nuova”(新生)などは古くから多くの人々に親しまれている。したがってその分野の研究者も数多くなっている。そして欧米には立派なダンテ・コレクションを所蔵している図書館があつて中でもコーネル大学のものは特に有名であるが、幸い京都大学にも戦前からすばらしいダンテ・コレクション：旭江文庫が備えられている。それは大賀寿吉氏(明治3年—昭和12年 1870—1937)がダンテ研究への絶大な情熱と努力をもって生涯を通して収集された愛蔵書である。大賀氏の号は出身地である岡山の旭川に因んだ「旭江」であつたため、このコレクションも「旭江文庫」と名付けられている。敬虔なクリスチャン(プロテスタント)で非常に英語の堪能な方だったと云われる大賀氏は、武田製薬株式会社(大阪)に勤務され、多忙な日常にもかかわらずダンテ研究へのたゆまぬ意欲を抱き続けてその当時の京大文学部教官(新村出、厨川白村、浜田青陵、黒田正利等)と親交を結び伊太利亜会(大正8年12月発会)その他で、「中世紀とダンテ」、「ダンテとシェークスピア」、「ダンテとシェークスピアの人生観に付て」など講演もされたようである。また京都文学会編「芸文」、京大英文学会編



大賀寿吉氏とそのエクス・リブリス

「ミューズ」その他の雑誌にも寄稿されている。ダンテ学者山川丙三郎氏(明治9年—昭和22年 1876—1947)とも親しく文通していられたがその手紙を編集した「大賀寿吉氏の書簡」(イタリア学会誌、3, 7, 8, 11, 15号)によって当時のダンテ文献収集と研究につくされたご苦労のほどがよく理解できる。今日のように敏速に海外の情報を得られなかった時代にもかかわらずイタリアをはじめ欧米の学界、図書館、出版界とたえず連繋をとってダンテ文献の情報を集め資料を厳選して蔵書構成の充実をはかられた。そしてただ自分自身の研究のためにだけでなく、日本の若きダンテ研究者の便宜を配慮して

おしみなく自費で資料を取揃えられたのである。また昭和4年には自ら“A Dante bibliography in Japan. 1929. 4, 49p.”を大阪で刊行、さらに同年ヨーロッパにゆかれフィレンツェの Olschki 社から“Bibliografia dantesca giapponese. 2.ed., riveduta e corretta. 1930. 59p.”も刊行された。こうして明治から昭和初期にかけてのダンテ研究者のひとりとして大いなる功績をのこして昭和12年他界された。その後故人の遺志にもとずいて蔵書の大部分が御遺族から本学に寄贈されることになった。京大附属図書館では、昭和15年本学文学部に開講したイタリア語学イタリア文学講座の黒田正利先生（明治29年—昭和48年
1890—1973）の御指導を得てこの文庫を整理して昭和16年には「旭江文庫目録」“Catalogo della collezione dantesca donata da Giukiei Oga. 1941. 312p.”を刊行している。間もなく起った戦争のためイタリア出版物の購入不可能な状態が終戦後も永くつづいたが、その間ダンテはもとよりイタリア文学研究者の大切な糧となっていたのがこの文庫で、現在に至るまで学内に限らず学外の研究者にも広く利用されている。そして今ではそのほとんどが貴重な稀覯本と云える。またこの文庫にふさわしい中世ヨーロッパ風の優雅なエクス・リブリスが添えられて大賀さんの風格がしのばれるような気がする。

旭江文庫（2671冊）の内容は16世紀から20世紀初期にかけて各国で出版されたダンテの作品（原典と翻訳）約 600点と、ダンテに関する研究書、参考図書、雑誌、及び逐次刊行物で特にダンテ永眠 600年記念に当る1921年（大正10年）の出版物は最も数多く集められている。主なものをえらぶと：

1. ダンテ全集では18世紀から20世紀初期の刊本で完全に揃っているのが原典13点で、その中にはダンテ全集を1冊にまとめ、単行本として刊行した最初のものである E. Moore 改訂の Oxford 版の初版（1894年）から第4版（1924年）まで揃っている。全集の翻訳は英、独、仏語と日本語訳で、いずれも20世紀初期の出版である。

2. “Divina Commedia”（神曲）については最も力をいれて収集され、原典だけでも約 200点

ある。古写本やインクナブラはないが Codice Landino（1336）、Codice Trivulziano（1337）、Codice Cassinese、Codice Caetani の複製版がある。また神曲の初期刊本である1472年のフォリーニョ版、エージ版、マントヴァ版と1474年のナポリ版の4点を比較対照出来るように組合せて編集した複製版：Le prime quattro edizioni della Divina Commedia [Foligno 1472, Jesi 1472, Mantua 1472, Napoli 1474] letteralmente ristampate per cura di G.G. Warren, Lord Vernon [ed. da A. Panizzi] Londra, T. e. G. Boone, 1858. xxvi, 478p. 5 facs. f° もある。16世紀刊本を少しとりあげると：

1502年ヴェネツィア刊：まだ La Divina Commedia（神曲）と云うタイトルは定着しておらず Le terze rime di Dante …（ダンテの三行詩）となっている。そしてこれは当時ヨーロッパの出版界に革新をもたらし非常に好評であった Aldo Manuzio（1450-1515）のいわゆる“aldine”（アルドゥス版）の一つで、イタリック体活字によるダンテ著作の最初の小型本である。

1512年ヴェネツィア刊：Opere del divino poeta Danthe con suoi comentii …（詩聖ダンテの著作及びその註釈）となっている。これはフィレンツェの人文主義者で15世紀における最も権威のある神曲註釈者であった Cristoforo Landino（1424-1498）の評註が付いて精巧な木版画が入っている。

1555年ヴェネツィア刊：はじめて La Divina Comedia（神曲）のタイトルで Gabriel Giolito が刊行している。書誌学的にも記念すべき版でジョリート版と呼ばれている。編纂者はヴェネツィアの文学者 Lodovico Dolee（1508-1568）である。

1568年ヴェネツィア刊：文学者 Bernardino Daniello（1500-1565）の死後3年たって彼の註解付の神曲が出版されたが文法的解説が丁寧になされている。

1595年フィレンツェ刊：“Accademia della Crusca”の人たちによる神曲の最初の版でこれは1502年のアルドゥス版をもとにして編纂したものである。

以上の外に「神曲」の16世紀刊本は6点あるが省略する。

17世紀刊本はヴェネツィア1629年刊が1点、18世紀刊本は Accademia della Crusca 改訂、1716年刊；1726—27年刊；1751年刊；1752年刊；原典に17世紀ジェスイット派詩人 Carlo d'Aquino のラテン語訳と簡単な註のあるナポリ1728年刊（全3巻）の5点である。

19世紀、20世紀にかけて出版された神曲は数多く集められている。

ボッカチオの手によると云われた写本をもとにした Fanton 編の1820年版、Lombardi の註釈で非常に良心的であると評価された1820—22年版、19世紀ドイツのダンテ学者 Karl Witte 校訂の1862年版、初期ダンテ註釈者 Jacopo della Lana (1290? -1365) のイタリア語註解版を L.Scarrabelli が改訂して1866年に刊行したもの、スイスのダンテ学者 Giovanni Andrea Scartazzini(1837-1901) の註解のある1875—1900年版、ボッティチェリの図版の入った Nonesuch Press の1928年版など、当時の権威あるダンテ学者の註のある大切な版は一通り集められている。豆本も数点入っている。

神曲の翻訳は22の言語の訳が集められて、その中にはアラビア語、クロアチア語、ウェールズ語、ロシア語訳も含まれている。

3. “Vita nuova”（新生）については初版本（1576年刊）で最初のダンテ伝の作者であった Giovanni Boccaccio (1313-1375) の「ダンテの生涯」を合冊して、フィレンツェの Bartolomeo Sermartelli が刊行したものがある。その他19世紀、20世紀初期の出版で A.D'Ancona 註解の1884年版をはじめ、M. Barbi, G. L. Passerini, N. Scherillo G. A. Cesareo, N. Sapegno 等の校訂版がある。

翻訳には日本語をはじめ英、独、仏、デンマーク、スペイン、スウェーデン、ハンガリー語訳がある。

4. “Convivio”（饗宴）は16世紀刊本：ヴェネツィア1529年刊；1531年刊がある。そして19、20世紀初期の刊本と翻訳（日本、英、独、仏語）が

ある。

5. その他のダンテ著作：Rime（詩集）、De vulgari eloquentia（俗語論）、Monarchia（帝政論）、Epistolae（書簡集）、Eclogae（牧歌）、Quaestio de aqua et terra（水陸論）の原典と翻訳、そして Sette salmi penitenziali（痛悔七詩篇）のボローニア1753年刊がある。

6. 参考文献に関しては約1300点ある。とりわけ M. Barbi, T. Cassini, Isidoro del Lungo, G. L. Passerini, G. A. Scartazzini, M. Scherillo, K. Witte 等、戦前活躍していたダンテ学者の著書はほとんど網羅されている。その他ダンテの息子 Jacopo Alighieri, Pietro Alighieri らの「神曲の解説」、G. Boccaccio の「神曲」の註解と「ダンテの生涯」、Sandro Botticelli (1444-1510) の「神曲画集」、アリストテレス的詩論学者の立場から「神曲」を非難したシエナの B. Bulgarini (1535-1621) の著作(1583年から1602年までの刊本)が5点ある。

7. 最後に雑誌、逐次刊行物には Collezione di opuscoli danteschi inediti o rari. Il Giornale dantesco. Lectura Dantis. Studi danteschi. 等その他ダンテ研究だけでなくイタリア文学史、中世史関係の資料が約30種ある。

旭江文庫は1936年迄の出版物で終止している。先日来学したボストン大学ダンテ学会長 Cioffari 氏も、この文庫は米国においても第三位を下らないほど立派なものだが、収集が中断していることは非常に残念である、と述べていたと云うことである。戦後の新しいダンテ文献収集については文学部を中心に努力しているが未だ充分なものとはいえない。旭江文庫という優秀なダンテ・コレクションの基盤を備えている本学において日本のダンテ学研究の進展のためにも、大賀氏の偉業を継承し、その後のダンテ文献を補充することによって旭江文庫をより大きく成長させるとともに、その利用価値をさらに高めることを期待したい。

なお旭江文庫目録編集に関与した人々のうち、今も御健在の先輩・木寺清一、城戸善一、佐々木乾三、新村猛、谷口寛一郎の諸氏と筆者は、お互によりき経験を得たことをよろこびあっている。

（1982年3月）

外国図書（大型コレクション）について

昭和56年度外国図書（大型コレクション）購入費にもとずき、下記の資料を購入し、附属図書館に蔵置しておりますので、御利用下さいますようお願いいたします。

なお、教養部の林 功三先生にこの資料についての詳しい解説を執筆していただきましたので、御利用の手引きとして紹介いたします。

ワイマル共和国時代文献コレクション

（教養部・ドイツ語教室） 林 功 三

総数1,566冊を数えるこのコレクションは、「文学に反映したワイマル共和国」というドイツ語の名称のとおり、主には、ワイマル共和国時代の代表的な作家・詩人の作品や、雑誌を集めたもので、その多くが初版本であります。比較的多数の著作が収録されている作家の名前だけをいまABC順に列举してみますと、次のような人々が挙げられます。

H. Ball, M. Barthel, J. R. Beeher,
G. Benn, B. v. Brentano, B. Brecht,
A. Döblin, H. Fallada, L. Feuchtwanger,
B. Frank, L. Frank, G. Grosz,
W. Hasenclever, G. Hauptmann, H. Hesse,
A. Holitscher, E. Jünger, H. Johst,
G. Kaiser, E. Kästner, E. E. Kisch,
Klabund, Th. Lessing, E. Ludwig,
H. Mann, Th. Mann, W. Mehring,
A. Neumann, R. Neumann, R. Pannwitz,
E. Piscator, E. Reger, E. M. Remarque,
L. Renn, J. Roth, R. Schickele,
A. Schnitzler, E. Toller, B. Traven,
K. Tucholsky, J. Wassermann, F. Werfel,
C. Zuckmayer, A. Zweig, S. Zweig u. a.

このようなリストからもわかりますが、このコレクションは、まさに「文学に反映したワイマル共和国」というタイトルのとおり、ワイマル共和国時代の、革命的な文学をはじめ、リベラルな文

学、ファシズムの文学（ヨースト・ユンガー等）までを幅広く集め、文学だけをみてもさながら時代全体がわかるようなかたちをとっています。この巾の広さという点が、このコレクションの第一の特色であるといつてよいと思われます。

そもそも、この時代の文学の原資料は、社会主義的・革命的な文学作品はもとより、リベラルな文学作品の大部分も、ナチスによって徹底的に抹殺されたため、今日ドイツでもほとんど入手不可能になっております。いまよくこれほど当時の書物を集めたものと驚くほかありません。また、逆にナチスの文学は、今日の私たちには反ファシズムの文学以上に、入手不可能になっていますので、ファシズム研究がアクチュアリティを失っていない現在、このコレクションは研究者にとって貴重な資料であります。

さらに、巾の広さという点でいえば、このコレクションは、けっして文学に限られていません。Literatur ということばは、一般に《文献》をも意味しておりますが、このばあいもそうです。ワイマル共和国時代のドイツやオーストリアにいた著名な多くの社会民主主義者、共産主義者、ボルシェヴィスト、ロシアにいたドイツの共産主義者、さらにはワイマル共和国の政治家、哲学、経済学、社会学の分野における指導的な学者さらには自然科学者の著書をもこのコレクションは集めております。先述の作家、詩人、芸術家の第一

グループに対して、これを第二グループとみる
ことができます。第二グループの主な人びとの名
前を挙げてみますと、次のような人びとがありま
す。

V. Adler, N. Bucharin, F. Ebert,
K. Eisner, M. Harden, K. Kautsky,
G. Landauer, W. I. Lenin, K. Liebknecht,
R. Luxemburg, K. Radek, W. Rathenau,
C. Schmitt, A. Schweitzer, K. Einstein,
O. Spengler, L. Trotzki, M. Weber,
C. Zetkin u. a.

主として文学を研究対象にする研究者にとって
も、このような文献は不可欠なものであります。
私たちの教養部ドイツ語教室も、かねてからワイ
マル共和国時代の政治、社会思想史や労働運動史
の資料を意欲的に集めており、また研究をすすめ
ております。

ワイマル共和国時代の研究は、現在、文学芸術
の他にも、労働運動史、ファシズム研究、経済学、
社会政策論など、さまざまな分野でおしすすめら
れており、これらの分野の研究は、今後、現在の
世界にとっても重要な、総合的な研究に発展する
ことが期待されます。先ごろ、3月の末に京都大
学の各学部、研究所から、さまざまな分野の研究
者が集まり、このコレクションの共同利用に関す
る相談をいたしました。その折にも、この点は
共通の認識になっていたと思われます。

上述のように、このコレクションの第1の特色
は、たしかに巾の広さという点にあります。が、し
かし、それは、このコレクションがたんにディレ
クタント的な、蒐集マニアによって無差別に初版
本、希覯本を網羅されたものであることを意味し
ておりません。リベラルな文学やナチズムの文学
までもが巾広く集めていながらも全体はかなり明
確な政治的志向によって貫かれている、とみてよ
いでしょう。たとえば、ブレヒトの作品がこと
ごとく初版本で集められていること、マリク出版
社の刊行物の当時の出版物の大多数が収められ
ていることなどに、その特色がよくでています。後
者について調べてみますと、1967年、東独の芸術
アカデミーがおこなったマリク出版社展覧会に出

された全刊物のほぼ80パーセントが、このコレク
ションに収められています。つまり、67年にドイ
ツ民主共和国が国家的レベルで集めた古書の大部
分が、こんどまとまって日本に入ってきたことにな
ります。この一事をみても本コレクションの価
値がわかりますし、またコレクションの第2の、
重要な特色がどこにあるかがこれでわかると思ひ
ます。

このコレクションは、第2次大戦直後、西ドイ
ツのある町で連合軍の爆撃により廃墟となった家
屋の地下室を掘りおこしていたとき、瓦礫の中か
ら発見され、いったんアメリカに渡り西ドイツに
返却されたしろものである、と私たちは聞いてお
ります。ナチズムの荒れ狂うなかで反ファシズム
の政治的志向をもったひとりの無名の愛書家が、
身の危険を賭して隠匿していた蔵書だったのでし
ょうか。そして、この蔵書を、60年代以降、西ド
イツの本屋が、さまざまに補充して現在のコレク
ションにまとめ、このようなかたちで私たちの手
に入ったのでしょうか。上述の3月末の京都大
学のミーティングのさいに研究者のひとり、こ
とによると、これはナチスの押収した蔵書だった
のかも知れない、いずれにせよ、これらの書物は
血まみれの歴史のなかからのものであることを
私たちは忘れるわけにはいかない、と自己イロ
ニーをこめて語っておりました。たしかにかれの
いうとおり——売りに出した業者の意図はどう
であれ——歴史の重みは、私たちにこれを懐古
的・ディレクタント的なコレクションとみることを
許しません。最近日本でも「黄金の20年代」な
どといってワイマル時代の文化を半ば懐古的に紹
介する風潮が一部のジャーナリズムでは再び流行
しておりますが、コレクションを前にして、私た
ちはそういう受けとめ方をするわけには参りま
せん。「黄金の20年代」というのが神話でしかな
かったこと、ワイマル共和国時代というのは、文
化の領域においても、ルカーチ流の表現をかりれ
ば「進歩と反動のたたかひの時代」であったこと
を、何よりもこのコレクションは私たちに示して
います。

かってアデナウアー時代にも「イデオロギーに

とられない自由な立場」が強調され、「黄金の20年代」の神話が持ち出されたことがあります。ワイマル共和国時代は自由で民主的な時代であったのに、左右の過激なテロル潮流が、ワイマル連合のような中庸と自由の民主主義をつきくずしたのだ、といわれました。あれは歴史の現実を隠蔽し、ファシズムを降って湧いた災難のようなものとみなし、若い連邦共和国を反動的な伝統的路線に結びつけようとした、悪質なイデオロギーでした。じっさいには、ワイマル共和国の時代にも、歴史におくれたドイツの市民階級は時代の矛盾を解決できなかったのです。だから、共和国のなかでDDPのような政党は、何ら重要な役割を演じることなく、あれほど急速に衰退していったのです。文化的領域でも、「おゝ人間よゝ」の表現主義から、技術への熱狂、非合理主義的な「事実の独裁」の在即物主義へ、ナチズムへのあまりに急速な解体過程がみられたのでした。そういうなかで例外的にT. マンのような作家は、歴史の岐路に立って選択を迫られたとき、はっきりと「進歩」の側に立つことを表明したのでした。

ワイマル共和国のなかでは、文学を享受の対象とするのではなく、真の自由のたたかいの手段に転

換しようとした作家は、いっそう少数の例外にすぎませんでした。そういう例外がブレヒトでありマリク出版社文筆家たちでした。

このコレクションが、その重点の置き方だけをみても、「黄金の20年代」などというやくざな歴史評価とは対照的な歴史評価をおこなっていることを、私たちは知ることができると思います。

他方、しかし、私たちは、現在まだ、なぜワイマル共和国のドイツでは真の民主主義が根づかなかったのか、という問題を十分には解明しておりません。コミンテルン時代以来のドイツの歴史的研究は、現在も東西ドイツにおいてさまざまな潮流によって、さまざまな分野で、おしすすめられています。東西ドイツの政治路線の問題がそれにからみ、問題の解明は今日いっそう複雑で困難なものになってきているといえます。であればこそ、しかし、私たちにあって、ワイマル共和国時代の研究は、いっそうやりがいのある仕事である、といつてよいのではないのでしょうか。その意味で、このコレクションが広くかつ徹底的に共同利用され、真の学問の発展に役立てられることを希望します。

——資料紹介——②

中 院 文 庫

中院文庫は具平親王を遠祖とする村上源氏の流れをくむ久我家第七代通親の五男通方を家祖とする中院家伝世の旧蔵書で、大正十二年住友吉左衛門氏が姻戚関係の縁故で中院家より文書を含む典籍千四十一冊を一括購入して本学に寄贈されたものである。その蔵書内容は室町末期より江戸末期に及ぶ国学の註釈書、歌書を中心に元 日 節 会 次第、除目部類、中院家拝賀記など中院歴世の朝儀典礼に関する日記、書留、覚書および石清水関係、加茂祭使記等社寺に関する宗教的行事、そのほか当家装束記などの有職故実に関するものなど多岐にわたっている。これらはほとんど自筆の原本で占められ、当時の風俗史、文化史、あるいは

宮廷の行事または貴族の生活を知る上にも貴重な研究資料となっている。ことに源氏物語、古今集の註釈は中院の学祖と称せられる第十四代通勝、その子通村、孫通純、曾孫通茂と続いて江戸末期まで継承されてきたものである。

通勝(永保元年—慶長16年)
(1558—1611)は室町末期の国学界における重鎮の一人であった。三条西実枝(三光院豪空)、細川幽斎らに師事し、宗祇、三条西家と続く正統派源語学を受け継いだのである。また幽斎からは古今和歌集の伝および秘奥を学び歌人としても当時の歌壇に重きをなしていた。こうして中院家に源氏物語、古今集の註釈書が家学として歴代世襲されたのはこの通勝の基礎固めによるものと言っ

ても過言ではない。通勝の代表的な著書としては第一に岷江入楚を挙げなければならない。岷江入楚は河内本、河海抄始め前人の註釈書を網羅しそれに自己の註釈も加え集大成したもので源語については現在においても最上の註釈書として用いられている。ほかに源氏物語聞書、中院通勝記、歌書には詠歌大既の註釈書、百人一首抄などがある。

通勝の嗣子通村（天正16年一承応2年
1588-1653）および孫通純（慶長7年一承応2年
1612-1653）は通勝の学風を継承しやはり正統源語学者として国学界に重きをなしていた。また通村は歌道にも長じ当時並ぶものなき名手でありその上世尊寺流の能筆家として世に知られていた。通村の著書としては通村の講義を通純が筆記したという源氏物語草稿、江戸初期の記録をとどめた塵芥記、歌集には中院通村詠草、中院通村歌集などがある。なお通純には古今和歌集聞書がある。

通勝に始まった正統派源語学も曾孫通茂（寛永8年
1631-1691）に至って熊沢蕃山の古礼古楽の復興と言う新しい思想の影響を受け、王政復古的な新風をその著書にも講義にも採り入れた進歩学派に移行して行ったのである。通茂の嗣子通躬（二元文4
1743）も父の学風を継ぎ以後通藤、通枝、通維、通古、通知、通繫、通知と受け継がれ江戸末期にまで及んでいる。そもそも中院家は武家伝奏の家系であり、通茂も役目柄江戸へ下向する機会も多く、江

戸において武家に接触するたびに朝廷の衰微を嘆いていた時でもあり蕃山の思想に共鳴したものであろう。また通茂も通村と同様に能筆家として知られ、その自筆本も流麗な筆致で書かれている。著書としては源氏聞書、蕃山の源氏外伝の異本と称せられ通茂が外伝から道学と音楽を抜き出し潤色したものといわれている源氏御抄、伊勢物語不審覚書のほか一連の伊勢物語註釈書、樗記があり歌集としては和歌の名手としても聞え高く中院通茂歌集詠歌え大概などがあり、また通村、通純、通茂の歌集を合した三槐和歌集もある。さらに、通茂か、一門の人の作といわれるもので源氏物語音楽事の一冊がある。この書は蕃山の思想に影響されたものか源氏物語の簞木、若紫から篝火までの帖より音楽に関係ある部分を抜粋して、楽器の解説も付けそれに私勘、自説などの註を加えたものである。

そのほか文庫の中には歴世の通枝記、十輪院内府記などの日記、当家書法、古今伝授起請文など家学に関するもの、後水尾院歌集、三条西実隆の逍遙院百首、中院第十代通秀の所持していた耕雲明魏自筆本と称せられている仙源抄は道勝に伝わり現在も当文庫中に所蔵されている。

（附属図書館 森島 啓）

医学図書館の開館時間の延長

医学図書館では、昭和57年4月1日より、開館時間を延長し、下記のとおり開館しています。ぜひご利用下さい。

記

平日 午前9時から午後8時まで

土曜日 午前9時から午後5時まで

（但し、日曜、祝祭日、創立記念日および解剖体祭日は休館）